

近江における地蔵盆

―最小単位的地縁コミュニティ―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤 賢治

近江における地蔵盆
ー最小単位の地縁コミュニティー

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

Name:

KATO Kenji

Title:

Jizōbon in Omi: The Smallest Unit of the Local Community

Summary:

Jizōbon, a traditional summer event centered in the Kansai region that honors the *Jizō* deities, has long been passed down as a children's festival. It is considered to hold an important position as the smallest unit of the local community within a town. I would like to trace the origin of the event from the perspective of *Jizō* belief and consider its role in the future.

はじめに

「地蔵盆」というと京都市内の代表的な民俗行事の一つであると認知されている。夏の風物詩として八月の下旬、お盆休みが明けた次の土曜日と日曜日の二日間、町内会の単位で開催されるというのが、一般的であろうか。本来は旧暦で地蔵菩薩の縁日にあたる七月二十四日がその日となるが、現在では、新暦の八月二十四日前後の土日に行われている。子供の祭りであり、主役の子供たちが楽しむことができる金魚すくいやおやつ配り、豪華景品が当たる福引きなどのイベントを大人たちが準備するのである。お寺の住職の読経や百万遍数珠繰り（数珠まわし）、御詠歌の奉納などの仏事的な行事もあるが、どちらかというと楽しい催しが中心である。

筆者は京都市中京区の出身であり、まさにこの「地蔵盆」にお世話になった。お盆休みの楽しい家族旅行が終わり、夏休みも残すところあと少し。宿題も残っているが、それを気にしながらも最後の楽しみとして「地蔵盆」があった。もう四十数年前の遠い昔の話であるが、筆者が暮らしていた町内には多くの子供たちがいた。市内の中心部からは少し西に外れた高度経済成長期に出来上がった新興住宅地、いわゆる下町で小さな家がひしめき合っていた。その

ような場所で、地蔵盆は活気に満ち溢れた町内会の一大イベントであった。筆者の町内の近くにある一〇〇戸あまりが入居する新しいマンションでも地蔵盆が行われており、そこには、若い世代の家族がほとんどで、我々以上の盛り上がりがあり、羨ましく思ったことが懐かしく思い出される。

さて、筆者は三十歳になった年（平成九年 一九九七年）に近江（滋賀県）に移り住み、そこから近江をフィールドとして、宗教民俗の研究をはじめることになった。研究の内容は多岐に渡ったが、その傍らで「お地蔵さん」と呼ばれる石仏と、それを丁寧に安置する祠（ほこら）を至るところで見かけ、そこで繰り広げられる近江における「地蔵盆」という行事に興味を持ち続けてきた。

詳細は後述するが、これまでに取材した場所は、大津市仰木、今堅田、下阪本比叡辻、長浜市の旧市街地、野洲、そして近江八幡である。現状は、おそらく京都もそうであろうと思われるが、少子高齢化に直面し、長年に渡って続けられてきた大切な行事と理解しつつも、その継承に関しては、様々な不安を抱えているという現状がある。

京都市は、文化財保護課が中心となり、世代を越えて受け継がれてきた民俗行事で、町内の年中行事となっている「地蔵盆」の役割を再認識し、時代の

変化に応じた工夫や新たな趣向を取り入れながら、未来に引き継がれるように「京の地藏盆」を「京都をつなぐ無形文化遺産」として選定している。

今回の論考ではまず仏教思想、信仰としての地藏信仰のはじまりと広がり、そこから地藏会、地藏祭り、そして地藏盆へとつながる地藏盆の歴史などを紐解く。最終的に近江八幡における聞き取りを紹介し、近江における「地藏盆」の現状を報告するとともに、地域コミュニティのあるべき姿を考えてみたい。

第一章 地藏信仰と地藏盆のはじまり

(一) 地藏信仰とは

地藏菩薩の名前と姿

はじめに「地藏菩薩」の名前について考えてみたい。インドで生まれた時の名前は「クシテイ・ガルパ」であり、日本語で直訳すると「クシテ」は土地、大地を意味し、「ガルパ」は子宮という意味を持ち、胎、蔵などとも翻訳される。すなわち「地藏」とは、「大地を自分の蔵とする者」ということになる。地藏菩薩は、大地を司る（担当する）菩薩であり、その大地は、我々にとって最も不可欠な酸素を供給する植物を育み、栄養分として補給する穀類や野菜、そしてそれらを捕食して成長する家畜を養うのである。他にも、化石燃料である石炭や石油、天然ガス、また、金属の元となる各種鉱物も大地から生まれてくるのである。

地球上に生きる全てのものが大地に由来し、その大切な大地を見守っている菩薩が地藏菩薩である。言い換えれば、我々は日常的に大地からの恩恵を受けているが、それはすなわち地藏菩薩のご加護であるともいえる。

次にその姿にも注目したい。我々が日常、目にする地藏菩薩像は、僧形で、右手に錫杖を、左手に「如意宝珠」を持つている。錫杖は、「行脚」の象徴であり、六道（地獄・畜生・餓鬼・阿修羅・人間・天）の世界をあまねく歩き巡ってくださるという意味があり、上についている六つの輪は、「六波羅蜜」という菩薩が行うべき六つの修行（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若）を表している。如意宝珠は意のままに宝物を生み出すことができる宝の珠であるという。大地こそが我々が欲する全てのものを生み出すところであり、そこを見守っているのが地藏菩薩なのである。

地藏菩薩は、その名前、姿から、地球そのものを表す仏であり、衆生の様々な願いをかなえてくれる、現世利益を施し、霊験高い菩薩であると考えられてきた。

地藏菩薩が登場する經典等

地藏菩薩が登場する經典等について考えてみたい。「地藏三經」と呼ばれる經典がある。「仏説大乘大集地藏十輪經」「仏説地藏菩薩本願經」「占察善悪業報經」の三つの經典がそれにあたる。その他に、日本で作成された偽經であるといわれる「仏説延命

地藏菩薩經」や「十王經」^{註1}、三井寺（園城寺）の僧実睿がまとめた「地藏菩薩靈驗記」などがあり、これら經典に書かれている地藏菩薩の姿が、現在の地藏信仰のもとになっている。

「十輪經」には、地藏菩薩は多くの衆生を救うために、毎朝様々な禪定に入り、憂や苦しみ、飢え、病氣、争い、疲弊、煩惱、自然災害、悪鬼、怨賊などの苦しみから救ってくれる。また、先述の大地を守る仏であるという意味合いから、一切の草木の根、芽、茎、枝葉、花、果実を成長繁茂させることができると説き、年老いた夫婦に代わって田植えをする地藏菩薩の伝説が各地で語られるなどしている。

そこから発展して、偽經であるといわれる「延命地藏經」には、衆生の苦しみを除き、安らぎをもたらす十種の福について説明されている。具体的に、「女人泰産」女性の安産。二、「身根具足」身体が健康である。三、「衆病悉除」病氣平癒。四、「寿命長遠」寿命が延びる。五、「聰明智慧」聡明な知恵を得る。六、「財宝盈溢」財産に溢れる。七、「衆人愛敬」人々に好かれる。八、「穀米成熟」五穀豊穰。九、「神明加護」神々に守護される。十、「証大菩提」悟りを得る。

そして、さらに以下の八種類の禍から逃れることができる^{註2}とされている。一、風雨災害。二、他国の侵略。三、国内の反乱。四、日蝕月蝕。五、星の異変。六、鬼神の災い。七、飢渴。八、病氣。

「十輪經」もさることながら、この「延命地藏經」によれば、この經典を大切にして地藏菩薩を礼拝供

養することで、多くの福に遭遇し、身の上に降りかかる様々な苦難を乗り越えることができるという、究極の現世利益を享受することができると説かれているのである。

地藏信仰の研究者である真鍋廣濟によると、正倉院文書の中に「地藏十輪經」などの地藏信仰に関する經典を書写した記録が見られることから、少なくとも奈良時代には地藏菩薩の信仰なるものがあつたと考えられる。

三井寺実睿の「地藏菩薩靈驗記」と『今昔物語集』

おそらくこれらの經典がもとになり、靈驗譚としてまとめられたのが、十一世紀半に三井寺(園城寺)の僧実睿が編集した「地藏菩薩靈驗記」であろう。ここには、より具体的に、どの誰が、どのように地藏菩薩と出会い、どのような恩恵を受けたのかということが説話として語られている。

そして、十二世紀のはじめに完成した説話集『今昔物語集』巻十七に所収されている三十二編にわたる地藏菩薩の説話は、実睿の「地藏菩薩靈驗記」がもとになっていると考えられている。また、ここで注目しなければならないのは、「靈驗記」をもとにしたという『今昔物語集』巻十七の地藏菩薩に関する説話の主人公が、大寺院の高僧や京都の名だたる貴族ではなく、地方の庶民であり、話の内容も庶民の生活の中にあるものが取りあげられている点である。

『今昔物語集』は、地藏菩薩に関する説話に限らず、

観音菩薩や阿弥陀如来など、仏教に関するものが収録され、全国各地に広がった。中世は、文字を読むことができる一般庶民はほとんど無く、『今昔物語集』に掲載されている仏教説話が、口承で伝わり、よく似た話が地方の伝説として、現実にあつたかのように語られ受け継がれていくという流れがあつたと考えられる。

中でも地藏菩薩に関する説話は、庶民の生活に近く、苦しみと生きる庶民にとって、心が救われる物語であり、地藏菩薩を熱心に信仰するという実践につながるきっかけとなつた。

(二) 地藏盆のはじまり

地藏盆のはじまりとその起源

庶民を中心とした地藏信仰の広がりについては、既述の通りであるが、今回の論考のテーマとなつている地藏盆については、どのような変遷があるのだろうか。正直なところ、民間信仰に基づく行事であるため、残された資料が皆無に等しく、そのはじまりや広がりについて詳細に論じている論考はほぼ存在しないのが現状である。

確実にわかっているところを見ていきながら、その全体像を想像することにしてみたい。

まず、地藏盆の開催日が、旧暦の七月二十四日あるいは新暦の八月二十四日であるのはなぜであろうか。これは、中国宋の時代に活躍した禅僧虚堂(きどう)(一八五―一二六九)が記した『虚堂録』による。中国五代(九〇七―九六〇)の時代、湖北省五祖山の

戒禅師が毎月一日から三十日まで日ごとに如来や菩薩を割り当て、礼拝していた。その儀礼が日本に伝わり、「三十日秘仏」^{〔註2〕}と呼ばれ、親しまれるようになった。その中で、地藏菩薩は二十四日が縁日となっており、年に一度、旧暦であれば七月、新暦ならば八月の二十四日に地藏菩薩のお祭りが行われるようになったと考えられる。

その祭り(地藏盆)はいづから日本で行われるようになったのか。地藏盆の起源については、真鍋廣濟の『地藏菩薩の研究』の中で少し触れられている。それによると、黒川道祐撰『日次紀事』の貞享二年(一六八五)七月二十四日の条に洛外の六地藏巡礼が盛んに行われていたことと、加えて以下のような記事が見える。

「洛下の兒童はおのおの香華を街衢の石地藏に供養してこれを祭る」(原文は漢文)

貞享二年の時点で、京都の街で地藏祭り(地藏盆とは書かれていない)なる子供の祭りが行われていたことがわかる。

また真鍋は、地藏祭りがはじまった理由には二つあるとしている。一つはこの『日次紀事』によるもので、この地藏祭は、平安時代に鬼魅が入つてこないう京都市の町の四隅で神を祀つて祈つていた「道饗祭(あえ)り」という祭りが地藏盆となつたという説である。ただこの「道饗祭り」は平安時代から行われていたとされており、この祭りが、江戸の初めごろに

盛んになったであろう地蔵盆につながることは考えにくいと否定している。

もう一つは、寛文八年（一六六八）に森本迪菴（てきあん）によって刊行された『浄家寺鑑』^{〔註3〕}の記事によるものである。そこには江州園城寺（三井寺）の僧浄照が、子供のころ戯れに地蔵尊を描き、子供たちを集めて多くの花を地蔵尊に供えて遊んでいたが、成長して園城寺の僧侶となった時に病で亡くなった。冥界に入ると地獄の閻魔庁に行き、責め苦を受ける間際、一人の沙門（僧侶）が現れ、自分はかつて浄照が戯れに描いた地蔵尊であると告げ、その時から浄照を見守ってきたという。そして、地獄から救い出した。戯れに描いた地蔵尊であっても地獄から救ってくれるという話をもとに、親たちが、子供たちのために地蔵祭りを行うようになったと記されている。

真鍋は、この『浄家寺鑑』の記述は「地蔵祭り」であるが、これが地蔵盆のはじまりを示すものであると認識している。

地蔵盆が行われる地域

また、その範囲については、「地蔵盆の行われるのは近畿地区に限られており、他の地区には近畿のように盆月の二十四日に子供の手によって行われる地蔵祭り（地蔵盆・地蔵會）は見られないようである」と『地蔵菩薩の研究』に記されている。なお、地蔵盆の分布に関しては、文化庁が昭和四十四年（一九六九）に発刊した『日本民俗地図一（年中行事）

十七図・盆』に記載されており、当時の地蔵盆、地蔵祭りの開催地を知ることができる。

その範囲は、京都市、大阪府北部、奈良県、滋賀県という近畿圏に集中しており、その他、西日本では九州の一部、中部では愛知県、北信越では福井県、富山県、新潟県あたりに見られ、関東、東北、北海道にはほぼ見られない。

中でも滋賀県の地蔵盆については、林英一の『地蔵盆―受容と展開の様式―』にその調査の報告書があるが、琵琶湖の周辺、県内全域に点在しているという特徴が見える。

第二章 地蔵盆と地蔵石仏

（一）地蔵盆という行事の内容

現代の地蔵盆という行事の内容については、村上紀夫『京都地蔵盆の歴史』（法蔵館 二〇一七年）や、「京都をつなぐ無形文化遺産 京の地蔵盆」地域と世代をつなぐまちの伝統行事」というウェブサイトに詳しく紹介されている。具体的に以下に紹介してみる。

・日程

地蔵盆は、旧暦七月二十四日、または新暦八月二十四日（先述した地蔵菩薩の縁日）の当日と前日、あるいはその日付け付近の土曜日、日曜日を中心に行われている。

・開催される場所

石仏であるお地蔵さんを祀った祠の前が比較的多い。その他、個人宅の座敷や駐車場などの空き地、道路上、集会所、公園などで開催される。

・運営のかたち

町内会または、町内の子供会などが運営主体となっており、町内単位に行われることがほとんどである。運営は大人が中心である。かつては子供に託されていたところもある。また、鉦や太鼓などで行事の開始を知らせる役割など、子供も「地蔵盆」の運営に参画することで、多様な世代間の交流が見られる。

・お地蔵さんのお化粧など

「地蔵盆」が近づく、町内の人たちは、お地蔵さんを祠から出して、新たに彩色する「お化粧」を行い、新しい前掛けを着せる。

・供物などの飾り付け

町内の人たちからお供えを集め、お地蔵さんを祀る祭壇に花や供物、お札などを飾り付ける。

供物としては、紅白の餅や落雁（白雪糕）といった菓子、果物、精進物のお膳などが供えられる。

・会場の様子

会場まわりは灯籠や行燈、提灯などで飾られる。子供が生まれると、健やかな成長を願ってその子の名前を書いた提灯が作られ、その子が「地蔵盆」に参加しているあいだ毎年飾られる。

・仏事的な伝統行事

「地蔵盆」は、僧侶による読経や法話が始まるころが多い。町内によっては、子供たちが直径20

3メートルの大きな数珠を囲んで座り、大人もその輪に加わりながら僧侶の読経にあわせて順々に回す「数珠まわし」(百万遍念仏の一種で、「数珠繰り」ともいう。)が行われる。また、長老が御詠歌を歌う、あるいはカセットテープで流す。

その他、伝統的な行事だけでなく、お菓子の配布やゲーム大会、スイカ割りなど、子供を主体とした様々な行事が行われる。

・つくりものなど

日用品を使って人形などをつくり、その年の話題や、物語の主人公、または情景をしつらえるなどの「つくりもの」を毎年つくることを主な行事としているところがある。

・お菓子配り

子供たちが喜ぶお菓子配りは、ほとんどの「地藏盆」で行われている。最近では、スーパ―などで地藏盆のお菓子セットが販売され、それらを振舞う流れになっているところもある。

・飲食物の振舞い

お菓子配りのほか、昼食あるいは夕食として町内の世話役によるカレーライスやうどんなどの軽食が振舞われる。また、焼きそば、綿菓子、ポップコーン、生ビールなどの屋台が設けられるところもある。

・福引き

子供にとって最も楽しく気持ちがかぶる福引きは、主にプログラムの終盤に行われる。中でも「畚くわおろし」といった昔ながらの形式で行うところもある。「畚」とはかごのこと、くじで当たった景品

をかごに入れて、家の二階などの高所から吊り降ろすものだが、最近ではほぼ見られなくなったという。

・供物のお下がり

お菓子などの供物は、お下がりとして子供たちに配布される。夏の終わりに体力を消耗した子供たちの栄養を補給しようと落雁を配ったともいわれている。

・イベント

ゲーム大会など子供向けの行事がプログラムに並ぶ。夜になると花火大会や盆踊り、映画会などが行われるところもある。また、最近では特に大人だけの交流の場がもたれるところもあり、町内における貴重なコミュニケーションの機会ともなっている。

「地藏盆」が終わると、祠から移動させたお地藏さんはもとの場所に戻る。

これらは、京都の地藏盆の一般的な内容に加えて、滋賀県での筆者の聞き取りによるものも加えたものであるが、各町内で行われる地藏盆は、それぞれ内容が微妙に違っていることも特徴であるといえる。

概ね行われる要素は重なるが、様々なイベントの内容や供物の種類、参加者の人数規模や年齢層、盛り上がりなどの雰囲気も町内によって全く違っているといつて良い。

しかしながら、一つほぼ共通しているものは、当たり前前のことかもしれないが、地藏石仏を中心として行われていることである。

次項では、地藏盆になくはならない地藏石仏について述べてみたい。

(二) 地藏石仏の正体と地藏信仰の広がり 石造地藏菩薩は小型阿弥陀如来

「講」や各種の祭りなど地縁で結ばれた人々による民間信仰の偶像(礼拝の対象となるもの)については、掛け軸や、札、木造の仏像、神像、自然石や樹木、そして石造仏などがある。今回取り上げている地藏盆という行事に登場する偶像は、一部を除き、ほとんどが石造りの地藏菩薩である。

なぜ、石造地藏菩薩なのであろうか。

滋賀県の郷土史家瀬川欣一は、その著書『近江石のほとけたち』(かもがわ出版 一九九四年)において興味深い見解を述べている。現在、我々が地藏盆で礼拝する「石のお地藏さん」と呼ばれる石造地藏菩薩の大半は、阿弥陀如来の坐像であるという。筆者も以前、お地藏さんといわれる石仏を拝ませ

ていただき、

前掛けの下を覗かせてもらうと、確かに坐像であり、足の上に前で手を組んで来迎印を結んでいるのを確認したことがある。地藏菩薩の基本形は立像で、右手に



写真1 大津市仰木の地藏石仏
よく見ると阿弥陀石仏であることがわかる



写真3 大津市今堅田の地蔵盆
多くの石仏を所有する個人宅 お供えも多い



写真2 大津市仰木の地蔵石仏

錫杖を、左手には宝珠を持っているが、その姿ではなかった。

瀬川によると、一般に「石のお地藏さん」と呼ばれている仏像は、鎌倉時代の後期ごろから、室町時代の末期にかけての二五〇年ほどの間に、庶民が先祖供養のために墓石として造立した小型阿弥陀石仏であるという。

中世の庶民は、当時は火葬が主であったようであるが、そのお骨を埋葬した墓の上に、魂が極楽浄土へ生まれ変わるようにという浄土思想から、像高数十センチの阿弥陀石仏と一石五輪塔を添えて置いたのだという。石仏を購入できない貧しい庶民は木片に五輪塔と阿弥陀仏を描いたかもしれないが、それは腐敗してしまい現在確認することはできない。次にその阿弥陀石仏が、なぜ地藏菩薩として礼拝されるようになったのかという疑問が湧いてくる。

大地を自分の蔵とする地藏菩薩

その答えは、十一世紀に園城寺（三井寺）の僧実睿が撰した仏教説話『地藏菩薩霊験記』に見ることができる。

「大地は鉱石や作物、樹木などあらゆる宝を生み出して、決してその働きは尽きることがない。同じように地藏菩薩は無限の功德を生み出し、衆生を救って、そのはたらきが決して尽きることがない。だから地と名付けられる。また、蔵とは貯えて積むという意味である。世間で蔵の

中に財宝や穀物を貯えて、尽きることなく大慈悲の教で導き、衆生の煩惱の苦を除き、仏心の萌芽を成長させる。そこで蔵と名付けられる」

この論考の第一章の冒頭で紹介しているが、「地藏」という名前は、サンスクリット語でクシティ・ガルパといい、クシティが「土地、大地」、ガルパは「胎、蔵」という意味があり、地藏とは「大地を自分の蔵として、その大地に眠る素晴らしい財宝を持つて衆生を救う」菩薩であるという。

中世に、墓標として盛んにつくられた小型阿弥陀石仏群が、やがて災害等で地中に埋まり、近世に地藏信仰が民間に広がりはじめたとき、地中から掘り出され、あるいは半分地中に埋まった阿弥陀石仏を、地中（地の蔵）という別世界から現れた仏、すなわち地藏石仏であると考え、それに化粧をして、祀りはじめたのが地藏信仰の起源であり、やがてはその石仏をもとに地藏祭り、地藏盆へとつながっていったと考えることができる。

特に近江は室町時代中期に、一向宗と呼ばれた浄土真宗の布教活動が活発で、浄土真宗の門徒になる者が急増した。浄土真宗では、阿弥陀浄土の思想を中心とし、魂の救済を最も大切にしたため、墓石をもとにした先祖崇拝を軽視したといわれる。その結果として、門徒は墓を持たなくなり、これまでの墓も荒廃していったと考えられている。したがって、それまで墓石となっていた多くの阿弥陀石仏が、地中に埋もれていったのである。

(三) 地藏信仰のはじまりと広がり

「石のお地藏さん」と呼ばれる石仏の大半が小型阿弥陀石仏であり、江戸時代の地藏信仰の広がりとともに、掘り出された路傍の石仏(阿弥陀石仏)が「石のお地藏さん」となって町内や集落の辻や道端に祠が建てられ、丁寧に祀られるようになったという流れが理解できた。しかし、そのような地藏信仰自体がどのように民衆に広がっていったのだろうか。ここでは、その広がりの様子を紐解いてみたい。

六道の全てに配置され衆生を救ってくれる地藏菩薩

日本における地藏信仰のはじまりは、平安時代に遡る。釈迦の入滅後、一五〇〇年が経つと、末法の世の中となり、釈迦の教えが無くなり暗黒の世界が広がると考えられてきた。その末法の世が訪れるのが、平安時代中期の永承七年(一〇五二)であるとされ、比叡山横川の高僧恵心僧都源信によって、来世は極楽浄土に生まれかわろうと阿弥陀如来を信仰する浄土思想が積極的に貴族など知識人の間で展開された。その一方で、庶民に対しては、地獄の閻魔王と地藏菩薩が一体であるという信仰や、魂が転生する「地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天」の六道すべてに地藏菩薩が存在して、そこに落ちた魂を救うという考え方が広がった。皇族や貴族と違って一般庶民は仏教でいう作善(読経や作仏、写経、布施などを行って徳を積むこと)ができないため、極楽浄土へ行くことはできず、地獄を含めた六道の冥界を彷徨わなければならないとされていた。した

がって、生前から、地藏菩薩を信仰して、地獄に落ちても救ってもらおうという考え方が広まっていた。これが地藏信仰のはじまりといつて間違いない^{註4}。平安時代から鎌倉時代にかけて、徐々に民衆に広がりを見せるのであるが、室町時代に入ると一挙に民衆の隅々にまで地藏信仰が知られるようになる。

中世における地藏和讃の流行

そのきっかけの一つが、「地藏和讃」の流行である。和讃とは、いわゆる仏教的な内容を歌った歌謡である。その地藏和讃の冒頭と内容を以下に紹介する。

西の河原の地藏和讃の一部

帰命頂礼地藏尊 これはこの世の事ならず
死出の山路の裾野なる 西の河原の物語
聞くにつけても哀れなり この世に生まれし甲斐もなく
・ ・ ・

西の河原の地藏和讃の内容

「幼くして亡くなった子供たちは、いったん賽(さい・西・西院)の河原に集まって、幼いために、これまで徳を積むことができていないので、河原で涙を流しながら石を積んで、お父さんのため、お母さんのため、兄弟のためと積んでいく。そこに地獄の獄卒(鬼)が現れ、ここを娑婆と思って甘えるなど石積みを蹴散らす。

幼子たちは、あまりの悲しみに涙を流し許しを乞うと、そこに地藏菩薩が現れ、今日より後は我こそを冥土の親と思いなさいといつて幼子を抱きかかえ、哀れんでくれる。」

現代の我々であっても目頭が熱くなるような話であるが、この内容の和讃が、単調な二節を繰り返して室町時代の中期以降に人々に歌われた。乳幼児や幼児の死亡率が高かった当時、母親たちがこの和讃を感動の心持ちで聴き、悲哀に満ちた心が救われたと容易に推測できる。おそらく、女性の大半が、この悲しみを背負っていたと考えられ、地藏和讃の救いは、そういう意味で、急速に広がっていたのであろう。

郷土史家瀬川欣一は、その著書『近江 石のほとけたち』において、地藏和讃が流行して五〇〇年間、愛する我が子を次から次へと無くした母親たちは、賽の河原の物語を我が子の苦しみとして受け止め、死んだ子の乳の匂いと唾液の染み込んだよだれ前掛けの匂いを地藏菩薩に嗅いでもらい、「この匂いの子が賽の河原にあります。どうぞこの匂いをする我が子を、大勢の幼子とともに救うてくださるようにお願いします」と一心不乱に祈り続けたと想像している。

以上のように、地藏菩薩が、六道のすべての世界、特に地獄に落ちた亡者を唯一救ってくれる菩薩であるからこそ生前に礼拝するということにはじまり、地藏和讃に歌われた幼子を救ってくれるのが地藏菩

薩であるということを含め、中世半ば以降、地藏菩薩に対する庶民の信仰が爆発的に支持された。それだけでなく、六十六部回國巡礼や修験道との結びつきなども全国に地藏信仰が広がるきっかけとなったという。

そして、地中から現れた（掘り起こされた）地藏石仏をよりどころとして、地藏講、地藏祭りから地藏盆という行事とともに地藏信仰が地域に定着していったと考えられるのである。

第三章 現代における地藏盆

（一）地藏盆の歴史と今

村上紀夫著『京都地藏盆の歴史』第四章「近代の地藏会」によると、明治の初めに一旦地藏会や地藏祭りなどの行事や石仏が町から消え、そして明治十六年（一八八三）に復活。その時期から京都で「地藏盆」という名称が使われはじめたというのである。

経緯を一部紹介したい。明治四年（一八七一）に一つの布達が京都府から出されたという。内容は、町内に存在する大日如来や地藏菩薩の石仏や堂、祠を撤去するか、地域の小学校へ納めるなどの処置を行い、祭りや集会なども行わないようにというものであった。明治五年（一八七二）にも、精霊迎えや施餓鬼、六斎念仏などの盆行事を禁止する布達も出されている。京都府以外でも滋賀県、兵庫県、大阪府に類する布達がこの前後の年に出されているという記録がある。これは、明治政府の神道国教化の方

針に従って発布された神仏分離令の一環であると考えられるが、近世以降盛んに行われてきた町の行事である地藏会や地藏祭り、そして盆行事までもが、古く悪しき慣習であり、そのような行事に金銭や労力を使うのではなく、新しい国家をつくるために知恵を絞って邁進するようにとし、すべてを廃止すべきとなった。当時、大きな権力を持つて改革を断行した横村正直京都府知事による現在では考えられない命令が出された。しかし、当時の新聞の記事や、寺院や町内の文書によると、その命令に皆が従ったわけではなく、一時は、地藏石仏や、祠などが撤去されたが、その後徐々に各所で復活し、実施されている姿も見られ、警察などによる厳しい取り締まりは行われなかったという。そして、明治十六年に、「任他主義（そこで起こっている事実を重要視し、事の成り行きに任せるという）」で知られる北垣国道知事が、明治五年の布達を取り消すという布達を出したのである。

その年の八月十九日の「京都滋賀新報」^{〔註5〕}の「地藏盆」と題された記事によると、地藏盆と呼ばれる八月二十二日、二十三日、二十四日の三日間に地域で賑やかに飾り付けが行われる行事が、横村知事によって禁止されたが、今年布達によって解禁され、今年は盛大に行おうと各町内で盛り上がりつつある様子が見える。一方で不景気の中、費用がかさみ、家庭によっては困っているという声も聞くという内容となっている。

ここで重要なことは、この新聞記事に「地藏盆」

と表現されていることである。京都府が発する布達の内容と、「地藏盆」という言葉が、この記事に見られることによって、より多くの町内が復活に向けて動き出したと考えられ、また、この京都府の動きに滋賀県を含む近隣の府県も同調し、「地藏盆」という名称の行事として復活していったと考えられるのである。

中世から広がった地藏信仰は、近世に入ると地藏会や地藏祭りとして、夏の子供の祭りとして年中行事の一つに定着する。そして近代に入り、明治維新の政策によって一旦途絶えたが、明治十六年に、京都府を中心に「地藏盆」という名前で復活し、現代に至っている。地藏盆という行事は、魂の救いを求めた純粋な信仰が根底にあったと想像できるが、近代を経て、現代に入ると、水子供養や魍魎の進入、六道の救済などの信仰心は薄れ、子供たちのための楽しい夏祭りへと変化していくのである。

筆者は、これまでにいくつかの現代の近江における地藏盆を取材した。大津市今堅田に見られる地藏講と地藏めぐり^{〔註6〕}、大津市仰木辻ヶ下の地藏盆^{〔註7〕}、東近江市勝堂町の千体地藏堂における地藏講^{〔註8〕}、大津市比叡辻の千体地藏堂の地藏盆^{〔註9〕}などである。

今回は新たに、近江八幡の現在の地藏盆の姿を取材したので、次項でその詳細を述べてみたい。

（二）近江八幡の地藏盆

今回、近江八幡市の旧市街地における地藏盆の現

在の様子を取材する機会があったので、以下にその報告をしたい。

①近江八幡市永原町上（二〇二二年十月二十六日）

取材に応じていただいた方々…山本有司氏、山本敏雄氏、高嶋道夫氏、伊寄敏氏、本間繁利氏
町内の規模・開催日

町内の戸数は江戸期が最盛期であったというが、四十二戸という記録がある。現在は二十二戸。ほとんどの家は、夫婦二名が一人暮らしで、小学生の子供は居ない。

地蔵盆の開催日は曜日を問わず、七月二十三日、二十四日の二日間。かつては夜通し行っていたが、現在は昼間と夜のみ。

過去の地蔵盆

明治維新の廃仏毀釈の際に、地蔵石仏を琵琶湖に捨てたという伝説がある。

三十年から四十年前は、多くの子供（四十名ほどいたと思う）が参加し、子供たちの楽しい夏祭りであった。各家をお地蔵さんが移動して、毎年違う家で行われた。自分たちが子供の頃、大きな町家が当番だった年に、蔵も含めて家の中を探検するのが面白かった。お地蔵様のお供物は子供の食べ物、お菓子が中心で、お下がり配った。御華足（丸餅が積み重ねられている）と呼ばれるお供物の印象が強い。また、御膳当番と呼ばれる人がその準備をする。全体の段取りは一年の輪番である町内会長が仕切る。子供たちと大人も一緒になって、お経を聴きながら大きな



写真5 永原町上の取材の様子



写真4 永原町上の地蔵尊 永原町上提供

数珠を回す百万遍数珠練りが行われていた。年齢を超えた交流が良かった。大人と子供がその日は心を開いたかたちでコミュニケーションが展開する良い時間であった。

縄手町の地蔵盆は露店やつくりものなどが出て盛大に行われることで知られている。

現在の地蔵盆

現在は、完全に大人の祭りになっている。お地蔵さんの前で読経はするが、その後のナオライが中心になっている。数年前までは食べ物を持ち寄っていたが、最近は町内会の会費で賄っている。家族が寄り合う良い機会となっている。

コロナ禍とこれからの地蔵盆

コロナ禍において、三年間行事は中止。読経などの仏事的なことは行った。一気には戻らないと思うが、徐々に地蔵盆はもとに戻っていくと思う。

お地蔵さんは心のよりどころである。毎日お水やお花が絶えない。この文化は無くならない。三十年後はほとんどが空き家になってしまうのではないかと、五軒でも残れば、お地蔵さんは守っている。

②近江八幡市出町地区（二〇二二年十二月十五日）

取材に応じていただいた方々…川崎勇氏、森谷伸子氏、岡村益夫氏

町内の規模・開催日

近江八幡市出町二丁目目は現在二十戸。子供は四人のみ。地蔵盆の時には他家に嫁いだ娘の子供（外孫）



写真7 出町地区の取材の様子2



写真6 出町地区の取材の様子1



写真9 出町地区の地藏盆の様子2 岡村益夫氏提供



写真8 出町地区の地藏盆の様子1 岡村益夫氏提供

が帰ってきて参加するので、少し賑やかになる。開催日は商店街という特徴から、月末を避け、八月三日と四日の二日間。今は八月の第一週の土日となっている。

過去の地藏盆

お地藏さんは、天台宗安楽律院の末寺である東福寺に安置されている。現在は無住となっている。

地藏盆は小学校六年生までの子供が対象となっている。地藏盆の日には子供の名前を書いた提灯を飾る。当日は、近くの寺院の僧侶をお願いして読経してもらう。読経の中、百万遍数珠練りが行われる。この大きな数珠は、森谷さん宅で不動さんの縁日に講の人たちが寄って数珠練りをしていたので、それを地藏盆で使わせてもらっている。

我々が子供の頃は、年長のお兄さんやお姉さんに遊びや勉強を教えてもらった懐かしい記憶がある。
現在の地藏盆とこれから

一年で交代する町内会長が地藏盆全体の段取りを仕切る。出町二丁目には、新年会と並んで、地藏盆は夏の懇親会となっている。将来的には大人の地藏盆にしようかという声もあがっている。懇親会の大切さをみんなが理解している。特にコロナ禍で、群れることがなくなった。今後地藏盆などの町内の行事が大切になるのでは。この町内には新しい住宅も建ちはじめていますので、新規に町内会に加入してもらい、地藏盆にも参加して欲しいと思っています。現在の町内会長の岡村さんは、八幡小学校区（一区から二十区ある）のまちづくり協議会の会長を務めら

れている。小学校区全体のことも考えると町内会という地域社会の活性化、防災のことなども含め、様々な課題を抱えている。改めて考えると地蔵盆のような地域の行事をつなぎ続けていかなければならないと強く思っている。

③ 近江八幡市為心町中（二〇二二年十二月十五日）

取材に応じていただいた方々…佐々木常雄氏、五十子英雄氏、川部清氏、高田浩次氏

町内の規模・開催日

為心町は「上」「中」「元」の三つの地域に分かれ、「上」が四十五戸、「元」が八戸、そして「中」が十三戸とそれぞれ地域の規模が違っている。最近空き家が増えた「中」地区も最盛期には二十戸を数えていたという。日程は、八月二十三日の一日のみ実施する。

過去の地蔵盆

この地域のお地藏さんは、小さな厨子に入った木造の延命地藏尊で、元々この地区にはお地藏さんはなかったのだが、六十年ほど前に、地藏菩薩が「ここに帰りたい」といったという町内にお告げのようなものがあり、元々個人の持ち物であった延命地藏尊を為心町中の町内の地藏尊として安置したと聞いている。

地藏盆は子供の祭りであり、子供の成長を願う祈りがある。

三十年ほど前、我々の子供たちが参加していた頃は、左義長の山車をつくる費用を稼ぐために、焼き



写真 11 為心町中の地蔵盆法要の様子



写真 10 為心町中の取材の様子

そばやビールなどの飲食物を販売したり、パチンコ台を借りてきて、パチンコで楽しんだりしていた。楽しい思い出がある。盆踊りも盛大に行っていた。
現在の地蔵盆とこれから

現在町内に子供は居ない。大人の夏祭りとなっているのが現状である。

当日は、浄土宗浄福寺の僧侶に読経をお願いしている。提灯に絵を書いて吊したり、子供の名前が書いてある提灯を吊す。外孫でも孫ができれば提灯をつくっている。

朝十一時から飾り付けをし、十四時に僧侶のお参り、御詠歌（カセットテープで流す）、数珠繰り（十年前に古道具屋で購入）、夕方後片付けの後、懇親会という流れ。

お地藏さんの当番があり、毎朝、お水とお茶とお線香、お花は絶やしたことがない。毎月、十五日と三十日に当番と次の当番の家で道具の引き継ぎが行われる。当番になれば、十五日間毎朝お地藏さんのお世話をする。これは、させてもらうという気持ちでみんなお世話をしている。当番だけでなく、町内の人全員が、毎日祠に拝む習慣がある。

また、お正月には元日の十時に全員が約五分間ほどであるが、集まって挨拶をするという恒例の行事がある。また、この町内は、三月の近江八幡の左義長祭りに、毎年左義長の山車を出すことになっており、結束が非常に強い。

お地藏さんを祀ることと地蔵盆という行事は決して無くしてはいけなしいし、無くなることはないと思う。

近江八幡の旧市街地の三つの町内の地蔵盆を取材したが、町内の規模、地蔵盆が行われる日程、開催場所、お地蔵さんの形態や素材、伝説などそれぞれ違っていた。共通するところは、地蔵盆が元来、子供の夏祭りであること、かつては子供がたくさんいて盛り上がったが、現在はほとんど子供の姿が無く、大人のための祭りになっている。

そして、町内の懇親、親睦会としての役割があることや、貴重なコミュニケーションの機会となっていること、そして地蔵菩薩が心のよりどころとなっていることと、この行事を無くしてはいけなし、無くなることはないだろうという熱い思いがあったことが共通していた。

このことは、最終項でまとめたいが、貴重な取材ができたと考えている。筆者が、これ以外の近江における地蔵盆や地蔵講、そして地蔵信仰を取材した時の印象と全く同じものであった。

おわりに 最小単位の地縁コミュニティ――

現代の地蔵盆の様子を垣間見て感じたことは、子供の祭りである地蔵盆が、主人公（子供）の減少によって規模が小さくなり、また、支える人々の高齢化から、その継続も危ぶまれているという現状である。しかし、筆者が聞き取りをした町内では、この行事が現代社会において二つの重要な要素を内包していることがわかった。

一つは、信仰として町内の心のよりどころとなっ

ていることである。大まかな括りで見ると地蔵盆は仏事である。読経があり、百万遍数珠練りが行われる。しかし、地蔵菩薩という仏様が、仏教説話や伝説で語られているように、庶民の身近に存在して、地獄に落ちても救ってくれるという絶対的な救済者であり、無限の包容力を備えている。個人の生老病死という悩みや、苦しみを聞いてくれたり、火の神の側面もあり、町内全体の安全も見守ってくれるという万能的な仏様なのである。病を患い、今後どうになるか、医師に頼るしかないが、先が見えないどうしようもない不安を和らげてくれるのは、これまでも守ってくれた、町内のお地蔵さんである。もちろん、お地蔵さんが病を治してくれるわけでないことは理解していても、何かにすがり、小さくても光が見えるような支えがあることに心が救われるのである。すなわち心のよりどころという存在なのである。このことは、どの地域のお地蔵さんに対しても共通して語られていた。

二つ目は、地域コミュニティの場であるということである。

かつて、地蔵盆は、おじいさんおばあさん、お父さんお母さん、そして子供たちという親子三代が集まる行事であった。子供の祭りだということが、大人の結束にもつながっていたようである。大人たちにとって、子供の成長を見る機会が、最も幸せを感じる時間であるといえる。普段は家の中の大人との交流であるが、この日に限っては、他の家の大人とも交流する。大人たちも子供の友達や、その中で

遊ぶ我が子の姿を見る。子供たちも学校では同級生との関わりが多いが、この時ばかりは、先輩や後輩との交流がある。遊びや勉強を教えてもらいう絶好の機会となっていたという思い出を聞いた。

現代に至っては、地蔵盆における子供の存在がほぼ無くなりつつあるということであったが、大人のためのナオライ、すなわち懇親会は重要で、大人の祭りになっているとの声もあった。普段ゆっくり話すことがない近所の家族との交流が大切であるという認識は、どの地蔵盆でも見られた。

道路整備、上下水道、電気、ガス、ゴミ収集、教育、福祉などのインフラシステムは、現代に至って完全に行き届き、便利で快適になった。近世はそれらをすべて地域の人々が協力して行ってきたため、地縁のつながりは必然的なものであった。しかし、現代はすべて行政サービスの中で専門的に行われるため、必然的に地域の人々が協力することが無くなってしまった。もちろん、地域の運動会や文化祭などのイベントがその部分を担っているわけであるが、必然性が薄いため、参加者も限られている現状がある。

地蔵盆という行事は、年に一度であるが、お地蔵さんという絶対的な存在を中心として、町内においては参加しなくてはならない行事の一つとなっている。今年は都合悪いので参加しませんがというようなことではない。そういう意味において、地蔵盆という行事は、最小単位の深く濃い地縁コミュニティの場であるといえると考えている。

地域における子供の見守り、高齢者の一人暮らし、防災、そしてコロナ禍を経て、他の人との関わりの大切さ(利他)が浮き彫りになってきた。そういう意味において、地藏盆のような行事の存在は、今も一度見直さなければならぬ時にきていると感じる。大切であると認識しながらも地藏盆を実際に継続するためには、地域ごとに様々な課題がある。地藏盆に限らず、地縁のコミュニティをつなぐ場の必要性は、今後見逃すことができない重要事項となっていくはずである。

註

1. 「十王経」には、中国で先述された「仏説預修十王生七経」と、日本で作成された「仏説地藏菩薩発心因縁十王経」がある。「仏説預修十王生七経」には人は死後に冥土で十人の冥界の王から裁きを受けなければならないが、その苦しみから逃れるために生前予め供養しておく方法が記されている。ここには特に地藏菩薩の靈驗について記されていないが、日本で作成された「仏説地藏菩薩発心因縁十王経」には、冥界の各王に地藏菩薩を含む仏教の菩薩や如来が当てられ、鎌倉時代には三仏が追加されて十三仏としての信仰に発展する。ここでは、地藏菩薩が閻羅王と習合しており、地獄に落ちた衆生を救ってくれる地藏菩薩の靈驗が書かれている。詳細は、加藤賢治著「下仰木の『十王堂』―地域のお堂が果たす役割―」(『成安造形大学附属近江学研究紀要』第十一号 二〇二二年)に記している。
2. 「三十日秘仏」二十四日の地藏菩薩をはじめ、十八日の観音菩薩、二十八日の不動明王など、各仏の縁日として知られている。
3. 洛中(京都の市中)の浄土宗寺院の名鑑。全八巻四冊。

もともと洛中の寺院を前集として刊行し、洛外の寺院を後集にまとめて出版する予定だったが、後集が刊行された形跡はない。

4. 地藏信仰のはじまりについては、加藤賢治著「里山の民間信仰―仰木の地藏信仰について」(『成安造形大学附属近江学研究紀要』第七号 二〇一八年)に詳しく紹介されている。

5. 現京都新聞。現在も京都府と滋賀県の一部(特に大津市や湖西、湖南地区)を範囲としている。当時も今も事件事故に加え地域の文化を伝える役割を担っている。当時は特に記事が府民や県民に大きな影響を与えていたと考えられる。

6. 「古式祭祀に見るコミュニティとそこに展開されるコミュニティ」(大津市今堅田一丁目の愛宕講と地藏講を中心に) 加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第三号 二〇一四年

7. 「里山の民間信仰―仰木の地藏信仰について」 加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第七号 二〇一八年

8. 「土人形の魅力 東近江の小幡人形を訪ねて」 加藤賢治 文化誌『近江学』第七号 成安造形大学附属近江学研究紀要 二〇一五年

9. 「下阪本のお地藏さん」 加藤賢治「湖都の文学」大津市文化祭実行委員会 二〇二二年

参考文献

- ・田中久夫『地藏信仰と民俗』岩田書院 一九九五年
- ・速水侑「源信」吉川弘文館 一九八八年
- ・速水侑「日本古代貴族社会における地藏信仰の展開」北海道大学文学部紀要 一九六九年
- ・速水侑『地藏信仰』塙新書 一九七五年

・眞鍋廣済『地藏菩薩の研究』三密堂書店 一九六〇年

・『日本古典文学全集 今昔物語集 二二 小学館 一九七二年

・村上紀夫『京都地藏盆の歴史』法蔵館 二〇一七年

・下泉全曉『地藏菩薩 地獄を救う路傍のほとけ』春秋社 二〇一五年

・五来重『石の宗教』角川選書 一九八八年

・林英一『地藏盆―受容と展開の様式』初芝文庫 一九九七年

・瀬川欣一『近江 石のほとけたち』かもがわ出版 一九九四年

・「古式祭祀に見るコミュニティとそこに展開されるコミュニティ」(大津市今堅田一丁目の愛宕講と地藏講を中心に) 加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第三号 二〇一四年
https://onigaku.org/fundamental/wp-content/uploads/2022/03/kiyou3_06_kato.pdf

・「里山の民間信仰―仰木の地藏信仰について」 加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第七号 二〇一八年
https://onigaku.org/fundamental/wp-content/uploads/2022/03/kiyou7_03_kato.pdf

・「下仰木の十王堂―地域のお堂が果たす役割―」 加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第十一号 二〇二二年
https://onigaku.org/fundamental/wp-content/uploads/2022/03/kiyou11_04_kato.pdf

・「土人形の魅力 東近江の小幡人形を訪ねて」 加藤賢治 文化誌『近江学』第七号 成安造形大学附属近江学研究紀要 二〇一五年

・「下阪本のお地藏さん」 加藤賢治「湖都の文学」大津市文化祭実行委員会 二〇二二年